

# 日本語のナラティブの協働構築における参加者の意識と話題展開の分析

## —母語話者同士で語る留学中の苦労話による人間関係促進のあり方の探求—

夏雨佳(東京外国語大学大学院生) 中井陽子(東京外国語大学)

### 1. はじめに

日常会話において我々は、自身の経験をもとにしたナラティブを語り、相手から共感を得ることがある。そして、ナラティブは語り手が一方的に語るものではなく、語り手と聞き手が協働構築するものであり、それによって語り手と聞き手が感想や意見を共有し、人間関係構築を図っている(植野, 2012; 三井, 2018 等)。そのため、ナラティブの協働構築の仕方から人間関係促進のあり方の一端を探ることができると言える。だが、これまでのナラティブの研究は、語りの構造や、語り手と聞き手の相互行為等に注目するものが多く(植野, 2012 等)、参加者の意識に着目しつつ、話題展開の中でナラティブがどのように協働構築されて人間関係を促進させているかを分析するものは少ないため、詳細に分析する必要がある。特に、参加者が互いに似たような経験を語り合い、それに対する感想や意見を確認し合うことで、価値観が共有され、仲間意識を高める効果があると考えられる。そこで本研究では、似た経験を持つ日本語母語話者が語り合う留学中の苦労話のナラティブを取り上げ、フォローアップ・インタビュー(FUI)で得られた参加者の意識とともに、話題展開の中でのナラティブの協働構築を分析する。これにより、参加者がいかにナラティブを協働構築しながら互いの価値観を共有し、人間関係を促進させているかを探る。

### 2. 先行研究

Sacks(1974)では、日常会話におけるナラティブの連鎖組織は、「前置き(preface sequence)」（語り手がナラティブを語り始める許可を求め、聞き手と交渉したりする部分）、「語り部(telling sequence)」（語り手がターンを保持し、ナラティブの結末、オチまで語る部分）、「反応部(response sequence)」（聞き手がナラティブに対する理解を示したり評価したりする部分）、という3つの構成要素から成り、語り手と聞き手の協働構築によるものだと強調されている。そして、Tannen(1984; 2005)は、感謝祭の食事会中の会話に現れるナラティブに着目し、参加者達が似たような観点や話題でそれぞれ自分のナラティブを語ることを「まわしストーリー(story round)」と呼んでいる。「まわしストーリー」では、ナラティブの前置き(例: Did I tell you what happened...)を語る必要性が低いという特徴があり、聞き手による評価、質問等の反応がナラティブの構築に貢献し、参加者間の親しい関係(rapport)作りに繋がっていると指摘している(Tannen, 1984; 2005)。

一方、日本語母語場面におけるナラティブの協働構築に関する研究も行われている。植野(2012)では、親しい学生同士の語りを分析した結果、聞き手が語りの内容に対して自らの経験や知識、思いを述べながら語り手に働きかける様子が見られたとしている。そして、そうした聞き手の行動は、語り手との親密で対等な関係性を創出・維持するために重要であるとしている。また、山本(2013)は、物語の語り手と受け手(聞き手)による「セルフ発話」(物語の登場人物の声として聞かれる発話)の中でも、特に受け手が語り手の物語に参入して用いるセルフ発話は、受け手が物語を極めて的確に理解していることを示す一つの方法であると指摘している。さらに、三井(2018)は日本語母語場面におけるナラティブを分析し、その反応部において聞き手がナラティブに対する評価と意見を述べることで、語り手と聞き手の間で出来事に対する意見や捉え方等の価値観を共有し、仲間意識を高めていると報告している。

### 3. 分析方法

会話の参加者は、中国に1年間留学経験のある20代の母語話者の女性J1, J2, 男性J3で、3人は中国留学時の知り合いであるが、会話データ収集日に約1年ぶりに会話することになった。会話データは、母語話者J1, J2, J3によるオンラインの雑談(20分20秒)である。会話前に、3人には中国留学中の苦労話を話すように依頼しておいた。そして、J1に雑談の様子を録画してもらい、収集した。会話直後に、各参加者に会話感想シート(会話全体の感想、会話相手への印象等)を記入してもらった。そして、会話データ収集後の1週間以内に個別にFUIを約1時間程度行い、会話相手に対する印象や、発話をした意図等、会話時の意識を尋ねた。分析では、Sacks(1974)の「前置き」、「語り部」、「反応部」というナラティブの構成要素をもとに認定を行った。そして、南(1981:91)の「まとまった意味」から成るものという「話題」の定義に従い、まずナラティブと認定された留学中の苦労話を「中話題」とし、次に1つの苦労話の中の前置きと語り部、反応部をそれぞれ「小話題」として認定した。さらに、包括的な観点から語られる類似の苦労話のまとまりを1つの「大話題」として認定した。なお、各苦労話の前後に参加者による司会進行が見られたため、それを各大話題の繋ぎの部分として認定した。その後、実質的な発話は、サトラウスキー(1993)の発話機能、堀口(1990)の聞き手行動、植野(2012)の語りの聞き手の働きかけ、山本(2013)

の「セリフ発話」等を参考に、ナラティブの語り手による「情報提供」、「同意要求」、および聞き手による「情報要求」、「感想」、「言い換え」、「セリフ発話」、「類似体験を語る」に分類した。なお、語り部における聞き手の反応は語り手の発話の中に挿入し、{ }に入れて示す。

#### 4. 分析と考察

分析の結果、まず、収集した会話データから、大話題(中国留学に関する話題)が9個見られ、その中に中話題(J1, J2, J3による苦労話)が14個見られた。そのうち、中話題(2人の語り手が協働構築した苦労話)が2個見られた。表1は、J1, J2, J3による会話で見られた、大話題、中話題、小話題(苦労話の前置き・語り部・反応部)の詳細を示している。各話題には、話された内容が分かるように話題タイトルを付している。なお、各大話題の繋ぎとしての司会進行の部分は網掛けで示し、( )は司会進行を行う参加者と各話題の主な発話者を示している。

表1 母語話者 J1, J2, J3 による会話の大話題、中話題、小話題

大話題 (中国留学に関する話題)	中話題 (J1, J2, J3による苦労話)	小話題(苦労話の前置き・語り部・反応部)	
		前置き・語り部	反応部(理解・評価を示す)
1.他の国の留学生との文化の違い	司会進行(J3)		
	1-1. 苦労話「他の国の留学生に怒られた話」(J1)	苦労話(J1)	反応「怒られたのが怖かった」(J2, J3)
2.中国と日本の文化の違い	司会進行(J3)		
	2-1. 苦労話「中国人の聞き返しの仕方」(J2)	苦労話(J2)	反応「知識として知っていても、怖い」(J1, J3)
	2-2. 苦労話「中国人の時間の概念」(J1)	苦労話(J1)	反応「相づちのみ」(J2, J3)
	2-3. 苦労話「感謝の回数が少ない」(J2)	苦労話(J2)	反応「文化が全然違う」(J1, J3)
3.中国語力が足りない	司会進行(J1, J2, J3)		
	3-1. 苦労話「中国語力が足りず、外に行くのが怖い」(J2)	苦労話(J2)	反応「大丈夫になったきっかけ」(J1, J3)
	司会進行(J2)		
	3-2. 苦労話「言語面が一番大変だった」(J3)	苦労話(J3)	反応「パスが怖かった」(J1, J2)
4.中国での食生活	司会進行(J3)		
	4-1. 話題「なんでも食べた」(J1)		-
	4-2. 苦労話「パクチャーが食べられなかった」(J2)	苦労話(J2)	反応「中国人はぶよぶよが好き」(J1, J3)
	司会進行(J1, J2)		
5.中国の病院	4-3. 苦労話「自分で日本食を作る」(J3)		-
	司会進行(J3)		
	5-1. 苦労話「病院の待ち時間が長い」(J1)	苦労話(J1)	反応「相づちのみ」(J2, J3)
6.言語のニュアンス	5-2. 苦労話「医者が説明してくれた単語が難しい」(J3)	苦労話(J3)	反応「専門用語が分からない」(J1, J2)
	司会進行(J2)		
7.授業の開始時間が早い	6-1. 苦労話「先生に怒られた」(J1)	苦労話(J1)	反応「言語のニュアンスが分からない」(J2, J3)
	7-1. 苦労話「授業の開始時間が早い」(J1, J3)		-
8.方言が理解できない	8-1. 苦労話「警備員の方言が分かりにくい」(J1, J2)	苦労話(J1, J2)	反応「相づちのみ」(J3)
9.留学生生活の感想のまとめ	9-1. まとめ「苦労したが、結局楽しい留学生活を送れた」(J1, J2, J3)		

次に、表1の話題展開、および J1, J2, J3 が記入した会話感想シート、FUIの結果を踏まえて分析した結果、会話全体で、留学中の様々な側面について、3人が均等に似た苦労話のナラティブ(中話題)を語っている様子が見られた。例えば、大話題4「中国での食生活」では、J1の4-1「なんでも食べた」、J2の4-2「パクチャーが食べられなかった」、J3の4-3「自分で日本食を作る」という苦労話(中話題)が見られた。これは、大話題4「中国での食生活」という同じ包括的な観点から、3人で順番にナラティブをまわしながら自分の類似の苦労話を語っているという点で、Tannen(1984)の「まわしストーリー」と似ていると言える。そして、前置きを語る必要性が低いという「まわしストーリー」の特徴も、3人によるナラティブの転換に見られた。例えば、J2が4-2「パクチャーが食べられなかった」という苦労話の語り始めに、「うちも結構なんでも食べられる方だったけど、パクチャーほとんど食べられなくて」とJ1の話に共感を示してから語り、前置きを明示的に話さずに自身のナラティブを開始していた。こうした3人が均等に似た苦労話を語ったことについて、FUIで3人は「全員の意見を聞きながら会話が進んでいた」「各自の様々な苦労話が聞けてより親近感を持った」と述べていた。このように、同じ経験を持つ3人が苦労話を語り合い、共有しながら、ナラティブを協働構築していくことで、仲間意識を高め、人間関係をより促進させていると言える。

さらに、次の3点のように、大話題、中話題、小話題といった話題展開の中で、参加者間のナラティブの協働構築が行われることによって人間関係がより促進されている様子が見られた。1点目は、大話題が転換する際、「司会進行」の発話が多く見られた。特にJ3による司会進行が多く見られたが(5/8件)、これについてFUIでJ1, J2は、司会進行を多く行っていたJ3が「話しやすい状況を作って聞いてくれた」と述べ、一方J3も「会話がスムーズに進むように気を遣いながら話していた」と述べていた。これにより、3人が均等に苦労話(中話題)を語る機会が与えられ、会話に参加しやすくなり、会話が盛り上がっていたと言える。2点目は、苦労話の反応部(小話題)で、聞き手が情報要求、感想を用いて、語り手と共にナラティブを協働構築している様子、つまり「聞き手によるナラティブの協働構築」が見

られた。これについて FUI で 3 人は「共感してくれて嬉しい」「深く掘り下げてくれたので会話が盛り上がった」と述べていた。これにより、語り手と聞き手が互いに共感でき、親近感を持っていたと言える。3 点目は、同じことを経験した 2 人が共に 1 つのナラティブを構築しながら語るという「2 人の語り手によるナラティブの協働構築」が見られた(中話題 7-1, 8-1)。これについて、FUI で J1 が「留学中もよく話した話題ですごく懐かしく盛り上がった」と述べていた。これにより、ナラティブを協働構築することで、参加者間の仲間意識を高めることができていたと言える。次に、上記の 3 点について、会話例(1)、(2)、(3)を取り上げ、詳細に分析を行う。

会話例(1)は、大話題1「他の国の留学生との文化の違い」の始めにある「司会進行」の部分である。まず、J1 が会話の最初の 1 で会話の始まりを宣言している。そして、J3 が 2 で「はい」と相づちを打ち、J1 が 3 で笑っている。FUI で J1 が「知り合い同士での会話録画ということや今までの関わりの中でも私が仕切るような役割にはなっていないので、若干の気恥ずかしさから笑った」と述べていた。そこで、J3 が 4 で「え、じゃあ、みんなが中国の留学で経験した、苦労話を、するということですね」と同意要求を行い、司会進行を行っている。FUI で、J3 が「会話の録画を担当している J1 が進行してくれると思ったが、ちょっと間があったので、僕が最初に話した方が良く考えて、テーマ振りをした」という理由を述べていた。このように、会話全体で J3 が主に「司会進行」を担当しながら、話題の展開をコントロールしている様子が見られた。なお、J1 と J2 も自分の苦労話を語った後、J3 に話題を振っている様子も見られた。(表 1 の中話題 3-2, 中話題 4-3 の前の司会進行)。ここから、参加者 3 人がお互いに配慮し、均等にナラティブを語ることによって、会話が円滑に進行され、ナラティブを協働構築しやすい状況が作られていたと言える。

**会話例(1) 大話題 1「他の国の留学生との文化の違い」: 司会進行**

1	J1	はい、始めました。	
2	J3	はい。	
3	J1	{笑い}	
4	J3	え、じゃあ、みんなが中国の留学で経験した、苦労話を、するということですね。	同意要求
5	J1	はい、じゃあまず、私、一つ行きます。	

会話例(2)は、大話題 3「中国語力が足りない」の中で語られた J2 の苦労話 3-1「中国語力が足りず、外に行くのが怖い」(中話題)の部分である。J2 が 87 で「私が、なんか一番大変だなってぱっと思いついたのは」と情報提供をし、苦労話の「前置き」を述べている。そして、J2 は続けて 89 で「中国語力が足りず、外に行くのが怖い」という苦労話の「語り部」を語っている。それに対して、「反応部」として、J1 が 90, 92 で「話しかけられたらどうしようもないな」、「分らんしどうしようってなったことはあったと思う」と自分の類似体験を語り、共感を示している。これについて、FUI で J2 は「強く共感されていると感じた」と述べていた。その後、J3 が 94 で J2 に外に行っても大丈夫になったきっかけについて情報要求している。それを受け、95 と 100 で J2 は「治す方法は、なんか、荒治療しかない」と「心の問題?」と情報提供と確認要求をしている。それを理解して、J1 は 108 で「やっぱり心の持ちようだよな」と言い換えて確認し、111, 113 で「間違ってもいいやー、みたいなの」、「勘違いしてもいいや、みたいなの」とその時の語り手の気持ちを引用したセルフ発話をを用いている。J3 も相づちを多く打ち、110 で「確かにね」と共感を示している。これについて、FUI で J2 は「2 人に理解してもらえて嬉しい」という感想を述べていた。このように、J2 が語り手として自分の苦労話を語る際に、他の 2 人は聞き手として、情報要求したり、理解した上でセルフ発話をを用いたりすることで共感を示す様子が見られた。これにより、語り手と聞き手がナラティブを協働構築しつつ、「間違ってもいいよ」という価値観が共有されている。特に J2 が類似体験の感想を語ったり、当時の語り手の気持ちを代弁して共感を示したりしている点は、山本(2013)と植野(2012)が述べるように、J2 が語り手 J1 のナラティブに対する的確な理解を示し、親密で対等な人間関係を促進させていたと言える。

**会話例(2) 大話題 3「中国語力が足りない」—中話題 J2 の苦労話 3-1「中国語力が足りず、外に行くのが怖い」: 聞き手によるナラティブの協働構築**

前置き	87	J2	ただでなんか、私が、なんか一番大変だなってぱっと思いついたのは、やっぱり、なんだろう、	情報提供
	88	J1, J3	{頷き}	
語り部	89	J2	自分の中国語の力が足りなくて、着いてばかりで、乗り換えの時とか、全部の時ひんか、何だろう、初めて聞く生の中国語とか、なんか先生は学生に易しくしゃべってる(J3: うん。うん。)じゃないですか。大学とかも、留学生も頭で分かってるから易しくしゃべってくれるんですよ。(J1: うん。)けど、なんか、なんも、フラットな感じで中国語で話しかけてくれる人達の、そのう、速さ、(J3: うん。)スピードとかが(J1: あー。)全然耳が慣れてなくて、何言ってるかわかんないし、分かんないってなった途端に、なんかその、声調が、なんかすごい、(J1: あー。)圧力がすごく出てきちゃって、それで結構なんか途中、前半の方は外に行くのが怖いってうのは(J1, J3: うん。)ありました。	情報提供
反応部	90	J1	確かに、//なんかタクシーも乗るの怖かったし、//話しかけられたらどうしよう、みたいなの。	類似体験を語る
	91	J2	そう。	
	92	J1	//分らんしどうしようってなったことはあったと思う。	類似体験を語る
	93	J2	そうそう。	
	94	J3	それは、何かきっかけでこう、慣れたとら、あ、これ外に行っても大丈夫だなって感じた、なんかきっかけみたいなの、	情報要求
	95	J2	なんか、こう、外に出るの怖いなって考えた時に、なんかもう、治す方法は、なんか、荒治療しかない。	情報提供
	(中略)			
	100	J2	外出て、町の人に話しかけられても、そうなんですよー、みたいな感じで、話そうしようと思って、なんか、心の問題?	情報提供、同意要求
	(中略)			
	108	J1	やっぱり心の持ちようだよな。	言い換え、確認要求
	109	J2	そう、そう、そう。	
	110	J3	確かにね。	

	111	J1	間違えてもいいやー、みたいな。	セリフ発話
	112	J3	うんうん。	
	113	J1	勘違いしてもいいや、みたいな。	セリフ発話

会話例(3)は、大話題8「方言が理解できない」の中で語られた J1, J2 による苦労話 8-1「警備員の方言が分かりにくい」(中話題)の部分である。J2 が 325 で「あの警備員のおじさん何言っているか分かりましたか」と聞き手の 2 人に情報要求して「前置き」を述べて、苦労話を語るきっかけを作っている。これを受け、J2 と同じ経験がある J1 が 333 で「すごいあの、すごかったもんね、方言が」と情報提供して共感を示し、「語り部」を始めている。その後、J2 が 335 で警備員が話しかけてくれるが全く会話ができなかったことを詳細に語っている。それに加えて、J1 が 337 で「え?え?って」、「あーあー!みたいな」と当時の戸惑う様子の発話を引用したセリフ発話をしながら中国語が聞き取れなかった自分達の状況を再現している。さらに、J2 が 339 で「強い印象がある思い出なあ」と感想を述べ、苦労話の結末をまとめている。また、「反応部」でも J1 と J2 がまた各自の当時の感想やセリフ発話を述べ、お互いに共感を示している様子が見られた。この部分について、FUI で J1 と J2 は「2 人の間でもよく話す話題だったので自分の中ではすごい懐かし、盛り上がっていた」と感想を述べていた。なお、J3 は聞き手としてこの苦労話全体で相づちを打ったり、笑ったりしている。それについて FUI で、「警備員のおじさんと話したことほとんどなかったの、2 人の話を聞いて楽しそうだなと思った」という感想を述べていた。このように、同じ経験を持つ 2 人の語り手による苦労話の協働構築が見られ、それによって会話が盛り上がり、人間関係の促進に繋がっていたと考えられる。

会話例(3) 大話題8「方言が理解できない」—中話題 J1, J2 の苦労話 8-1「警備員の方言が分かりにくい」: 2 人の語り手によるナラティブの協働構築

前置き	325	J2	あと、なんか、方言?!! 方言って何か、あの警備員のおじさん何言ってるか分かりましたか?	情報要求
	326	J3	うん。	
	327	J1	あー。(笑い)	
	328	J3	あー。	
(中略)				
語り部	333	J1	すごいあの、すごかったもんね、方言が。	情報提供
	334	J1, J2, J3	{ 領き }	
	335	J2	まあ、ほんとに何言ってるか分からない {J1: うん、うん。} くて。 {J3: 領き} でも、話しかけてくれるんですよ {J1: 笑い} {J3: はい、はい、はい。} J2! {J1, J3: 笑い} みたいなの感じて、 {J1, J3: うんうん。} { 領き } おお! みたいなの感じてやるんですけど、 {J1: うん、うん。} そっから会話全然できなくて。	情報提供、セリフ発話
	336	J3	{ 笑い }	
	337	J1	てかずっと笑ってるだけみたいなの。 {J2: そうそうそう。} { 領き } え?え?って。 {J2, J3: 笑い} あーあー! みたいなの。 {J1, J2, J3: 領き} それで適当に流す、みたいなの。	情報提供、セリフ発話
	338	J3	うん。	
	339	J2	そう。そういうのも、何だろ、話しかけられて嬉しいのに、 {J1: うん。} なんか、聞き取れなくて申し訳ないというか、 {J1, J3: 領き} っていうので、 {J3: うん。} 困ってはいないんですけど、ちょっと、強い印象がある思い出があっという。	情報提供、セリフ発話
反応部	340	J1, J3, J2	{ 領き }	
	341	J1	確かそこ。	
	342	J2	うん。	
	343	J1	一番なんかもどかしさみたいなの感じる時だったな。	感想
	344	J2	そう。	
	345	J1	くそ、分かるん。みたいなの。	セリフ発話
	346	J3	うんー。	

## 5. 結論

以上から、話題展開の中で母語話者による苦労話の協働構築がいかに人間関係促進に繋がっているかについて、次の 3 点が明らかになった。(1) 司会進行を行うことで、似た経験を持つ 3 人の苦労話を繋いで大話題を展開させており、それによって、参加者全員が会話に参加しやすくなっていた。そして、一つの大話題として、3 人の参加者が同じ包括的な観点から、似た苦労話(中話題)を均等に語ることによって、親近感を持つことができていた。(2) 苦労話の反応部(小話題)で聞き手が情報要求や類似体験の感想、言い換え、セリフ発話によって理解・共感を示すことで、語り手と価値観が共有され、親密な人間関係を促進させていた。(3) 2 人で共通の経験を協働で語ることで、会話を盛り上げ、仲間意識を高めていた。今後は、さらに日常会話に現れる様々な話題について語るナラティブの協働構築および人間関係促進の関係性を探り、日本語の会話教育に活かしたいと考える。

## 参考文献

- 堀口純子(1990). 上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動 日本語教育, 71, 16-32.  
 南不二男(1981). 日常会話の話題の推移 松江テキストを資料として 藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢 I 方言研究の推進 三省堂, 87-112.  
 三井久美子(2018). 価値観共有を目的としたナラティブの協働構築 立命館経営学 56(5), 71-94.  
 Sacks, H. (1974). An analysis of the course of a joke's telling in conversation. *Explorations in the ethnography of speaking*, 337-353. Cambridge: Cambridge University Press.  
 Tannen, Deborah. (1984; 2005). *Conversational Style: Analyzing Talk Among Friends*. New York: Oxford University Press.  
 植野貴志子(2012). 聞き手行動の社会言語学的考察: 語りに対する聞き手の働きかけ 日本女子大学紀要 61, 57-68.  
 山本真理(2013). 物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的展開— 社会言語科学 16(1), 139-159.  
 ザトウスキー, ポリー(1993). 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察— くろしお出版